

新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究

学習評価とは、学習指導要領に示す目標や内容に照らし、子供の学習状況を評価するものである。教師が子供の学習の成果を的確に捉え、指導の改善を図るとともに、子供が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにしていく必要がある。そこで、学習評価を教師の授業改善や子供の学習改善につなげる効果的な「指導と評価の一体化」について研究を進めた。また、観点別学習状況の観点の一つ「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当て、それを見取るための視点や方策について探ることで子供の学習改善につなげることを目指した。

<検索用キーワード> 学習評価 指導と評価の一体化 授業改善 学習改善
主体的に学習に取り組む態度 振り返り 授業マネジメントシート

研究協議会顧問

愛知教育大学教育学部准教授

竹川 慎哉（令和2、3、4、5年度）

研究協議会委員

あま市立美和小学校教諭

高井 基行（令和3年度）

あま市立美和小学校教諭

飯塚 恵理（令和4、5年度）

知立市立知立小学校教諭

正木 郁子（令和3、4、5年度）

瀬戸市立にじの丘中学校教諭

嶋津 智子（令和3、4、5年度）

蒲郡市立塩津中学校教諭（現蒲郡市立三谷中学校教頭）

羽田 康則（令和3、4年度）

蒲郡市立塩津中学校教諭

藤田 正和（令和5年度）

愛知県立豊田工科高等学校教諭

牧野 裕也（令和3年度）

愛知県立豊田工科高等学校教諭

柴口 英哉（令和4、5年度）

愛知県立知立東高等学校教諭（現愛知県立刈谷高等学校教諭）

野村 考平（令和3年度）

愛知県立知立東高等学校教諭

鋤柄 寿樹（令和4、5年度）

愛知県立一宮豊学校教諭

濱地 航平（令和3、4、5年度）

総合教育センター研究指導主事（現新城市立東郷中学校教諭）

林 栄治（令和2年度）

総合教育センター研究指導主事（現東海市立平洲小学校教諭）

是枝 享子（令和2年度）

総合教育センター研究指導主事（現愛知県立豊野高等学校教頭）

内山 真一（令和2年度）

総合教育センター経営研究室長（現安城市立里町小学校校長）

浅倉 幸代（令和2、3年度）

総合教育センター研究指導主事（現愛知県立一宮豊学校教頭）

津田 博史（令和2、3年度）

総合教育センター研究指導主事（現愛知県立一宮起工科高等学校教頭）

佐々木 博（令和3年度）

総合教育センター研究指導主事

猪狩 雄一（令和3年度）

総合教育センター研究指導主事（現幸田町立幸田中学校教頭）

松井 亮（令和3、4年度）

総合教育センター基本研修室長（現研修部長）

横地 喜之（令和4年度）

総合教育センター研究指導主事

柴田 朋宏（令和4年度）

総合教育センター研究指導主事

杉浦 直樹（令和3、4、5年度）

総合教育センター経営研究室長

佐々 恵（令和4、5年度）

総合教育センター研究指導主事

山田 公一（令和4、5年度）

総合教育センター基本研修室長

谷川永里子（令和5年度）

総合教育センター研究指導主事

杉山 寛仁（令和5年度）

総合教育センター研究指導主事

山田 和幹（令和5年度）

総合教育センター研究指導主事

叶井 順子（令和5年度）

総合教育センター研究指導主事（現豊川市立東部中学校教諭）

太田 恵里（令和2、3、4年度主務者）

総合教育センター研究指導主事

原田 挙志（令和3、4年度/令和5年度主務者）

1 はじめに

子供たちが、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が必要である。各教科等において授業改善を通して必要な資質・能力を育成する上で、学習評価は重要な役割を担っている。学習評価とは、学校での教育活動に際し、学習指導要領に示す目標や内容に照らし、子供の学習状況を評価するものである。教師が子供の学習の成果を的確に捉え、指導の改善を図るとともに、子供が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにしていく必要がある。そのため、教師の授業改善や子供の学習改善に生かすことを踏まえた学習評価に取り組むことが大切であると考えられる。

新学習指導要領では、全教科等の目標及び内容が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理され、各教科でどのような資質・能力の育成を目指すのが明確化された。それに伴い、観点別学習状況の評価は、資質・能力の育成の柱に沿って「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点に整理された。その中でも「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、知識及び技能を習得させたり、思考力、判断力、表現力等を育成したりする過程を通して行うものである。したがって、この観点のみを取り出して評価することは適当ではなく、他の観点に関わる子供の学習状況と照らし合わせながら評価することが重要であるが、何を見取ればよいのか捉えにくいという声も聞こえている。

そこで、本研究では、学習評価を教師の授業改善や子供の学習改善につなげる効果的な「指導と評価の一体化」の在り方について研究を進めた。また、三つの観点の中の一つ「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当て、それを見取るための視点や方策について探ることで子供の学習改善につなげていくことも目指した。

2 研究の目的

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、教師の授業改善や子供の学習改善につながる効果的な「指導と評価の一体化」の方法及び「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための視点や方策に関する研究を進め、研究協力校による実践研究を行うことで、各校種における学習評価への理解を深め、その充実に資する。

3 研究の方法

令和2年度（1年次）は、所内研究として研究の方針について協議を進めた。令和3年度から5年度（2年次から4年次）にかけては、研究協力校（小学校2校、中学校2校、高等学校2校、特別支援学校1校）の代表委員と所員による研究協議を行い、協力校での実践や協議を通して、その内容について成果と課題を検証した。

(1) 学習評価の在り方に関する協議（令和2年度）

国立教育政策研究所教育課程研究センターの『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』及び『学習評価の在り方ハンドブック』を基に、学習評価の基本的な考え方や観点別学習状況の評価について情報を収集、協議し、指導と評価の一体化を実現するための効果的な方策について検討した。

(2) 「指導と評価の一体化」に向けた「授業マネジメントシート」の開発と改善（令和3、4、5年度）

「指導と評価の一体化」及び評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立のために、単元で

の学習活動、評価方法、振り返りの視点及びタイミング、事後の授業改善に向けた取組等を記入する欄を設けた授業マネジメントシートを開発する。それを基に、研究協力校で授業実践を行い、学校の実状に合わせて改善点を協議しながら、よりよいものにするために検討を重ねた。

(3) 自己の学びの確認につなげる効果的な振り返りの方法についての協議と実践（令和3、4年度）

子供の発達段階や実態に応じた振り返りの方法や問い、視点について協議し、研究協力校で実践を行う。振り返りシートを活用した実践では、それをどのように評価するか協議をする。その実践を基に、「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための視点の一つとして生かす方策を探った。

(4) 授業改善と学習改善に向けた実践の成果と課題についての検証（令和5年度）

本研究における協議や実践を通して、教師の授業改善や子供の学習改善につなげることができたかを、アンケートや振り返りの記述、授業への取組等から検証し、その成果と課題についてまとめた。

4 研究の内容

当センターにおいて年間5回の研究協議会を実施した。また、研究2年次からは研究協力校を訪問し、研究推進のための授業参観及びその後の協議を実施した。次の表は、研究に関わる研究協議会及び授業参観の活動状況をまとめたものである。

研究年度	実施日	活動内容
令和2年次	6月22日	協議会①：研究概要の確認、研究計画の作成、資料紹介、情報交換
	9月18日	協議会②：各地区の現状について情報交換、研究方法や内容について協議
	10月19日	協議会③：研究方法や内容・計画について協議、決定、研究顧問の決定
	11月11日	協議会④：次年度の研究方針検討、次年度研究協力校について
	1月26日	協議会⑤：顧問による指導助言、次年度研究方針を決定、次年度の年間計画について
令和3年次	6月16日	協議会①：研究の概要、方針説明、情報交換及び方向性についての共通理解
	7月30日	協議会②：研究の進捗状況及び課題に関する協議、情報交換
	9月6日	研究協力校（美和小）訪問による授業参観及び研究協議
	9月13日	研究協力校（にじの丘中）訪問による授業参観及び研究協議
	9月21日	研究協力校（一宮豊）訪問による授業参観及び研究協議
	9月28日	研究協力校（知立東高）訪問による授業参観及び研究協議
	9月29日	研究協力校（豊田工科高）訪問による授業参観、後日オンラインにて研究協議
	10月18日	協議会③：研究の進捗状況及び課題に関する協議、情報交換
	11月10日	協議会④：研究発表会（中間報告）に向けての準備
	11月26日	第61回総合教育センター研究発表会（第1部会）にて中間報告
	12月6日	研究協力校（塩津中）訪問による授業参観、後日オンラインにて研究協議
2月1日	協議会⑤：本年度のまとめと次年度の取組について	
令和4年次	5月24日	協議会①：研究の概要・方針確認、情報交換及び方向性についての共通理解
	6月30日	研究協力校（塩津中）訪問による授業参観及び研究協議
	7月11日	研究協力校（知立小）訪問による授業参観及び研究協議
	8月29日	協議会②：研究の進捗状況及び課題に関する協議、情報交換
	9月13日	研究協力校（豊田工科高）訪問による授業参観及び研究協議

令和3年度	9月13日	研究協力校（一宮聾）訪問による授業参観及び研究協議
	9月29日	研究協力校（にじの丘中）訪問による授業参観及び研究協議
	10月18日	協議会③：研究の進捗状況及び課題に関する協議、情報交換
	10月21日	研究協力校（美和小）訪問による授業参観及び研究協議
	11月15日	協議会④：研究発表会（中間報告）に向けての準備
	11月25日	第62回総合教育センター研究発表会（第3部会）にて中間報告
	12月14日	研究協力校（知立東高）訪問による授業参観及び研究協議
	1月24日	協議会⑤：本年度のまとめと次年度の取組について
令和4年度	5月23日	協議会①：本年度の研究方針の確認、各校における研究の方向性について
	6月1日	研究協力校（塩津中）訪問による授業参観及び研究協議
	6月29日	研究協力校（知立小）訪問による授業参観及び研究協議
	8月8日	協議会②：授業実践参観の振り返り、研究の進捗状況及び課題に関する協議
	9月15日	研究協力校（一宮聾）訪問による授業参観及び研究協議
	9月19日	研究協力校（にじの丘中）訪問による授業参観及び研究協議
	9月27日	研究協力校（豊田工科高）訪問による授業参観及び研究協議
	9月29日	研究協力校（知立東高）訪問による授業参観及び研究協議
	10月17日	協議会③：授業実践参観の振り返り、研究の進捗状況及び課題に関する協議
	11月1日	研究協力校（美和小）訪問による授業参観及び研究協議
	11月15日	協議会④：研究の進捗状況に関する情報共有、研究発表会に向けての準備
	12月1日	第63回総合教育センター研究発表会（第4部会）にて研究成果の報告
	1月17日	協議会⑤：研究の総括

(1) 「授業マネジメントシート」の開発・改善

効果的な「指導と評価の一体化」の方法に迫るため、本研究の柱として位置付けている「授業マネジメントシート」の開発・実践と改善についての取組を報告する。

各教科・科目において学習する内容を単元ごとに授業計画として一枚のシートにまとめたものが「授業マネジメントシート」（資料1、別紙1）である。授業マネジメントシートには、上部に学校目標（目指す子供像）、単元名・目標・評価規準が示され、表形式として学習活動、三つの観点別の評価方法、授業後に教師の気付いた点を記入する欄が設けられている。授業マネジメントシートの作成に当たり意識した点は、次の三つである。一つ目は、学習内容の欄に、本時の目標及び振り返りを行うタイミング、方法、視点を記入する欄を設けたことである。二つ目は、評価方法の欄に「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」とが分かるように示したことである。「記録に残す評価」は、資料1に示すように背景を灰色などにする

【資料1 シートの一例】

授業マネジメントシート		小学校第6学年（学年）		外国語（教科・領域）	
○学習目標（目指す児童生徒の姿） ○場面：Unit Card Unit I like my town. ○単元の目標 ○単元の到達目標					
No.	目標・活動・学習内容	学習方法		評価	
		原形	変形	評価	評価
1	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
2	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
3	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
4	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
5-6	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
7	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
8	○目標：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。 ○活動：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。				
備考：授業の目的（見たい・見聞きたい）を明確にする。					

けたことである。これによって、教師が単元の途中で、授業の節目ごとに子供の様子から自らの授業を振り返り、気付いたことをメモし、次の指導に生かすことができるようにした。

令和3年度（2年次）は、研究協力校から「単元における評価の場面や方法が示されており、計画的に取り組めた」「単元の全体像を捉えることができ、授業の手だてを効果的に打つことができた」といった回答が見られたことは成果であった。一方で、「授業担当者でどの場面で何を評価するのか捉え方に差がある」「シート作成の負担感をどう減らしていくか」といった回答が見られ、シートに記載すべき内容を精選し、簡易で使いやすいものへと改善していく必要があるといった点で課題が見られた。

令和4年度（3年次）は、前年度の課題となっていた点の改善を意識して、単元の中で学習したことを活用して課題解決に当たる場面（ヤマ場）を設定し、授業担当者間で相談しながら作成していくように努めた。研究協力校から「ヤマ場を意識した単元計画をつくることで、ヤマ場に至るまでに必要な要素とは何かが明確になった」「授業で何を評価するのが明確になり、無理なく評価できるようになった」といった点で大きな成果が見られた。課題としては、「子供が何について考えればよいのか、授業の中での適切な問いかけについてより検討をしていきたい」「より多くの教科に作成・活用を広め、成果や問題点を共有して、学校全体で意識を高めていきたい」といった回答があった。

令和5年度（4年次）は、これまでの2年間で作成、記録して蓄積したシートを基にして、改善に向けた教師の取組過程の可視化を行うことを目指すこととした。その中で、教師がどのような意図で改善を試みたか、改善を行うことで子供の学びがどのように変容していったかが分かるようにして研究を進めるよう、研究協力校と共通理解を図った。

研究協力校との3年間を通じた研究の成果として、「単元構成の全体像が捉えやすく、手だてを効果的に打てた」「評価方法や場面が示されており、三つの観点をバランスよく見取るための計画が立てやすかった」「『指導に生かす評価』（形成的評価）と『記録に残す評価』（総括的評価）を意識して、授業を進めることができた」「『主体的に学習に取り組む態度』と他の二つの観点との連動性を意識し、各学習場面で目指す子供の姿を具体的にイメージすることにつながった」などが、研究協力校の意見から見取ることができた。

合わせて、最終年度（4年次）に見えた成果を紹介する。資料2は、ある研究協力校の授業マネジメントシートの一部である。こちらの学校では、授業後の教師がメモを残す欄を、二人の担当者が記載できるように分けて示しており、各学校の実態に応じて、シートを改良して活用していることが分かった。その上で、

同じ内容を学習する時間で、先に実施した教師の気付きを受けて、後から実施する教師がそのことを意識して取り組んでいることが見受けられた。このことから、授業者の振り返りの記録が当事者だけでなく、他の授業者の授業計画のヒントとして生かされていること、授業者同士の情報共有が授業マネジメントシートを介して活発になっていることが、成果として大きかった点として挙げられる。

なお、実践の詳細については、各研究協力校の実践報告で紹介する。

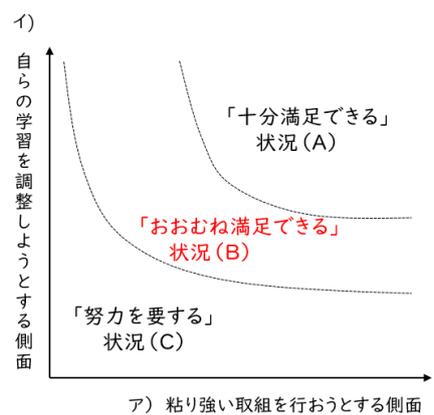
【資料2 ある研究協力校のシートの一部】

4-1	4-2
振り返り・授業改善1	振り返り・授業改善2
<p>キャラクターマップをつかったことで「話し」考えることが苦手の児童もとんとん考えることも出来るようになった。黒板は見ていながら子どもたちのシンキングツールを使うにはOK.</p>	<p>「場面の外に限定する!」 普段の会話ととることではない児童も自分の考えを多く書くことができた。 シンキングツールを使うことのメリットが授業に活かされた。</p>
<p>9割の児童が、この机だけで自分ほいというときに気づけていた。教師「おなかがついてから」と書いていた。授業の終わりに「おなか」を思い出して、机の上で「場面の外に限定すべき!!」</p>	<p>「場面を限定したことで「話しあふ」よく進んだ。言動が見える時間がふたつあった。</p>

(2) 効果的な振り返りの方法の追究

観点別学習状況の評価の観点の一つである「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための手だての一つとして、授業の振り返り活動に焦点を当てて実践したことを報告する。振り返り活動を効果的に行うに当たっては、『学習指導の在り方ハンドブック』に示される二つの側面（資料3）を踏まえて、振り返りの場面、方法、問いについて「授業マネジメントシート」の中に位置付けることにした。そして、その位置付けに当たって、教師が意識してほしい点として次の三つを共有した。一つ目は、単元の初めに子供が見通しをもつ場面を設定したことである。そのねらいは、子供が目的意識をもち、子供自身が課題を明確にすることで学ぶ意欲を高めることにつながると考えられるからである。二つ目は、単元の中で活動のヤマ場を設定したことである。ここで、ヤマ場とは、知識及び技能を活用して、課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力を育成する場面を指し、この場面は、単元の目標となる中心的な学習活動を行うところなので、記録に残す評価を行う場面としてもふさわしいと考えられるからである。三つ目は、単元を終えて学習を振り返る場を設定することである。そのねらいは、子供自身が自分で成長を見取ったり、次への課題を見つけたりするために必要な場面と考えられるからである。

【資料3 二つの側面】



そして、振り返り活動を行う際には、知識や考えを可視化することで子供の変容を教師が見取るためのものか、子供が学習への見通しをもつことで次の課題をもつためのものか、というように振り返りの目的を明確にすること、「今日の授業について一番大切だと思うことは何か」というように単元の内容に沿った「ねらいに迫る問い」を設定することを踏まえて実践した。

効果的な振り返りの方法の追究に当たっては、振り返りの問いかけを改善することから、子供の学習内容に深まりが見られたのでその一例を紹介する。資料4は、ある研究協力校において、同じ単元でヤマ場となる課題に取り組んだ後、生徒の授業内での振り返りを実施したものを前年度と本年度を比較して示したものである。前年度に実施した授業マネジメントシートからは、「グループ活動を通して新たな気づき」という問いかけに対する記述が、正答に至った生徒ほど少なかったという教師の反省があった。そこで、本年度は、どの生徒もグループ活動から得られた気づきが充実するように、「グループ活動を通して気付いたことや理解が深まったことをまとめる」というように問いかけ方を変更したところ、理解している生徒についても記述内容が充実したものとなった。このことから、振り返りの問いを授業マネジメントシートの中に位置付けるとともに、その反省点を明確にしておくこ

【資料4 ある研究協力校における生徒の振り返り内容の比較】

①今までに身に付けてきた知識を応用させ、各部に流れる電流を求めてみよう。

閉回路I
 $E_1 = R_1 I_1 + R_2 I_2$
 $E_2 = R_3 I_3 + R_4 I_4$
 $E_1 + E_2 = R_1 I_1 + R_2 I_2 + R_3 I_3 + R_4 I_4$
 $I_1 = 1.0$ [A], $I_2 = 0.5$ [A], $I_3 = 1.5$ [A].

閉回路II
 $E_3 = R_5 I_5$
 $E_4 = R_6 I_6$
 $E_3 + E_4 = R_5 I_5 + R_6 I_6$
 $I_5 = 1.0$ [A], $I_6 = 0.5$ [A].

②グループワークを通して新たな気づき
 $E = RI$: $E_1 + E_2 = R_1 I_1 + R_2 I_2$ と $E = R_3 I_3 + R_4 I_4$ を比較して解いた。

(前年度)

閉回路をたどる向きなどを確認していく。
端子間の電圧降下による証明も確認していく。
◆グループワーク後の記述「新たな気づき」では、理解している生徒の記述が少なくなりました。

閉回路I
 $E_1 = R_1 I_1 + R_2 I_2$
 $E_2 = R_3 I_3 + R_4 I_4$
 $E_1 + E_2 = R_1 I_1 + R_2 I_2 + R_3 I_3 + R_4 I_4$
 $I_1 = 1.0$ [A], $I_2 = 0.5$ [A], $I_3 = 1.5$ [A].

閉回路II
 $E_3 = R_5 I_5$
 $E_4 = R_6 I_6$
 $E_3 + E_4 = R_5 I_5 + R_6 I_6$
 $I_5 = 1.0$ [A], $I_6 = 0.5$ [A].

③グループワークを通して気付いたことや理解が深まったことをまとめる
 連立方程式を作ったので、2つの式を解いた。その分、1つずつの式を比較して、色んな観点から見ると、自分より、式の方がその理解が深かった。

(本年度)

とで、教師の授業改善につながり、更には子供の学習改善にも生かされた点は大きな成果であったと考えられる。

また、他の研究協力校の教師からは、「ポートフォリオ形式のシート（または、ロイロノート・スクール（株式会社LoiLo）などのICT活用）を設定することで、子供の学習の軌跡として残すことができた」「授業のねらいに迫る振り返りを実施することで、子供にとって目標とすべき姿が見えやすくなり、自己評価しやすくなった」といった意見が見られ、こちらも成果であったと考えられる。

一方で、教師からは、「見取りたい子供の姿や思考が表れるような、『授業のねらいに迫る問い』を更に検討する必要がある」「評価したいことは何なのかを意識した評価規準作成及び発問に難しさを感じる」といった意見があり、特に「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための問いの在り方、評価規準、問いのタイミングなどの点で課題があると考えられる。

なお、実践の詳細については、各研究協力校の実践報告で紹介している。

5 研究のまとめと今後の課題

「授業マネジメントシート」の活用により、単元を見通した評価計画やヤマ場における活動、振り返りの視点等を視覚的に捉えることができ、教師が授業改善を意識することにつながっている。各研究協力校の実態に応じてシートを工夫して活用されていること、授業者の振り返りの記録が当事者だけでなく他の授業者の次時以降の授業計画のヒントとして生かされていること、授業者同士の情報共有がシートを介して活発になっていることの3点が特に成果として見受けられた。

また、効果的な振り返りの在り方については、「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための問いの在り方、評価規準、問いのタイミングなどの点で課題が残るものの、単元目標の到達度や子供の学びの見取りについて教師と子供の双方で確認しやすくなったと言える。また、「授業マネジメントシート」の中に位置付けることにより、教師の授業改善につながるとともに子供の学習改善にも生かされていることが実感できた。

今後も「授業マネジメントシート」と効果的な振り返りの在り方についての試行錯誤を重ね、より活用しやすいものになるように改善を図っていくためには、教師は豊かな教材研究と発問研究等に努め、単元と各時の目標づくりを進めていくことが必要不可欠と考えられる。そして、子供が単元や授業の目標に到達する方法（教材に対する味わい方、分かり方）については、多種多様であることを意識して、多視点からの教材研究を行うことが大切であると考えられる。

<参考文献>

- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『学習評価の在り方ハンドブック』
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』
- ・石井英真・鈴木秀幸編著 図書文化社『ヤマ場をおさえる学習評価 小学校』
- ・石井英真・鈴木秀幸編著 図書文化社『ヤマ場をおさえる学習評価 中学校』